

海外臨床薬学研修報告書

研修期間：平成 28 年 2 月 28 日～平成 28 年 3 月 13 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

名城大学薬学部 5年

松岡 史華

私は、今回アリゾナ大学薬学部での海外臨床薬学研修に参加して、アメリカと日本の薬学教育や薬剤師としての在り方などを比較し、その後の自分の薬学生活と将来の薬剤師像について見つめ直すことが出来た。また、2週間、英語でのコミュニケーションや海外での食生活、集団行動や現地の学生との交流を通して、勉学以外においても、常日頃のモチベーションの維持の仕方や海外生活での適応力・生活力、協調性・積極性を養うことも出来た。

アメリカと日本の薬学教育において私が特徴的に感じたことは、アメリカのプレファーマシー制度である。プレファーマシーというのは、一般教養等を学ぶ大学のことであり、一度他大学のプレファーマシーで学んだ上で薬学部に進学するということは、薬学部に入學する時点での難易度が高いと言える。また、薬学部入學時には面接によるコミュニケーション能力試験もあり、入學時点での人間性も判断されるということで、より一層薬学部入學の難易度が高く、そのため入學希望時点での薬学生としての意識の違いや強い意志を非常に感じた。そのこともあって薬学生は皆、将来の理想像や協調性・積極性を持っており、発言や行動一つ一つに自信があるように感じた。また、薬剤師という資格取得を目標とするのではなく、手段としてその先の薬剤師像を見据えて学生生活を送っているようにも感じた。従って、アメリカには薬学生としての誇りや目標に向かった努力の姿勢が日本よりも強いという印象を受けた。

また、現地での授業に参加して主に感じたことは、アメリカの薬学生は日本よりもフィジカルアセスメントや実習内容、IPE が充実していた点である。また、病気の症状から病名を探る診断学を学んでいたという点は薬剤師というよりも医師の領域に近く、職能にとられない医療全体を幅広く視野に入れた授業が多く感じた。そしてそれは後述の、チーム医療間で薬剤師が円滑に業務を行えるために、薬学生の頃から臨床に特化した教育がされている理由であった。

また、研修の後半はアリゾナ大学付属の病院であるメディカルセンターにて現地のレジデント生と共に病棟ラウンドやカンファレンスに参加し、アメリカの臨床薬剤師の業務の様子、多職種連携を実際に目で見て感じる事が出来た。そこで私が感じたのは、やはりチーム医療の中での薬剤師の存在意義が大きいことであった。医師や看護師に対して自信を持って積極的に薬物に関する情報を提示する様子は、薬剤師もチームの一員であるという自覚が強いからであると感じた。それに比べて、日本はまだチーム医療という言葉のみが先走っている印象を受け、本当の意味でアメリカのような臨床薬剤師になるには、個人の意識的関与が重要であると考えた。しかし、アメリカはチーム医療としての薬剤師という位置づけが強い分、ラウンド時に患者と会話するのは医師や看護師であり、薬剤師は患者と話すというよりもチーム内での薬物面での関与が強かったように感じた。その点においては、日本の方が患者とコミュニケーションを交わす時間が多く、そのため、患者にとって薬剤師は身近な存在であると言えるのではないかと。

2週間の海外臨床研修は毎日が非常に充実しており、日々新しいことを学ぶ環境にいたこ

とで、残りの薬学生活を送る上でのモチベーション向上に繋がった。そして、実際に現地の薬剤師・薬学生と交流することで刺激を行き、自分の将来の薬剤師像について考えることが出来た。

最後に今回このような機会を与えてくださった大学の先生方、研究室の先生方、応援してくれた両親や友人、アリゾナ大学の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。